

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学研究科・修士1年

氏 名: 田川 結希

授業科目名	国際バイテク・リーダー育成
研修先(国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校 他(タイ・バンコク)
研修期間	平成31年2月12日～平成31年2月23日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>研修を通して、外国語とコミュニケーション能力の重要性を強く感じた。同じアジア圏であるにも関わらず、キングモンクット工科大学の学生間でのコミュニケーション・ツールは完全に英語で、当たり前のように英語を使うことに衝撃を受けた。私自身、研修が決まった頃から、英会話を中心とした学習を行っていたため、簡単な質問や日常会話をすることはできたと思うが、質問に対する答えや長めの英語を理解して返事をするのは難しかった。タイの学生が外国人留学生と臆することなく、自然に英語で会話し、英語の授業を受けて、英語で質疑応答する姿に羨ましさを感じると共に、英語で話すことも精一杯な自分の英語能力のレベルに恥ずかしさも感じた。タイの学生、先生方は、私たちに積極的に話しかけてくれた。聞きたいことも話したいこともたくさんあったが、ほとんど伝えられず、何度も悔しい思いをした。特にPBL(問題解決型学習、英語による議論)では、筆記や絵を使って、自分たちの意見をなんとか伝えることができたが、最後まで双方の意見が食い違い、思い通りに話し合いを進めることができなかった。しかし終了後、フィリピン出身の学生から、「必死に伝えようとする意志があったことは良かった、楽しく作業ができた」というコメントがあった。英語力を心配するよりも不十分な英語でも話しかけることの大切さ、質問をする積極性を持つコミュニケーション能力を持つことの重要性を知ることができた。</p> <p>もう一つ考えさせられたことは、王室に対する深い敬愛の心、仏教に対する篤い信仰心である。街のいたるところで国王の肖像画や写真が飾られており、チットラダー宮殿の王室プロジェクトやラッタナーコシン歴史展示館では、とりわけラーマ9世に対する人々の尊敬の念を感じた。さらに今回訪れた遺跡や寺院で数多くの仏像を見ることができ、タイの人々による深い信仰心を感じた。また、タイの生活に触れる中で、気候、料理、文化など日本とタイの様々な違いに気づくこともできた。初めは、顔も名前も知らない他の学生と12日間の研修プログラムに参加することは、非常に不安であった。しかし、事前学習など集まる機会を重ねるに従い、みんなで協力し、助け合うことができるようになった。皆で無事に研修を終えることができたことはとても嬉しい。今回の研修では楽しいことだけでなく、辛いこともあったが、全てが良い経験になった。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>日本で、英語の勉強をするだけでは、モチベーションを維持することは難しい。日本を離れ、海外の様々な言語・文化に触れることで、外国人の方とコミュニケーションを取る楽しさや各国の文化を学ぶ楽しさを再確認することができた。自分に足りないものを明確化し、新たな目標を立てることもできた。帰国してからは、自分の国際社会に向けての意識を高め、自らの視野を広げ、海外への中期・長期留学、色々な国や地域を訪ねることを目標に、語学や専門知識の勉強に一層力を入れていきたい。</p>	

## 平成30年度 学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

(学部または研究科・学年) 農学研究科・1年

氏 名: 三浦 菜乃

授業科目名	国際バイテク・リーダー育成
研修先 (国・地域) 滞在地	モンクット王工科大学トンブリ校 他 (タイ・バンコク)
研修期間	平成31年2月12日～平成31年2月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>現地のKing Mongkut's University of Technology Thonburi (KMUTT)の学生との交流について、これまで各々が培ってきた英語能力を活用した。日本人の学生は、相手の話す流暢な英会話を行うことが出来るというわけでは無かったものの、知っている若しくは調べた英単語を用い、手振りを交えながら自分の考えを相手に伝えた。PBLでは題材の「Zero Waste in Daily Life」について、研修事前準備の段階で、日常生活で家庭ゴミを減少させる方法について文献や農林水産省の提示したデジタル資料などの信頼の出来る情報を収集し、現地の学生とスムーズに情報交換が出来るように、専門用語の英単語を辞書を用いて調べた。その事前準備によって、ゴミ処理問題や環境問題について更に関心を持つようになり、それに関連するニュースや新聞記事を読み込むようになった。タイの学生とのPBL本番では、タイにおける家庭ゴミの処理方法などを知ることによってタイの生活の一部を垣間見ることが出来た。Lectureでは、KMUTTの教授の英語を用いた講義を受講することによって、自身の英語能力の程度を身をもって知ることが出来た。講義を集中して拝聴し、内容を把握し、質問を考えて発言することによって次第に英語を聞く耳が慣れてきて、以前よりずっと英会話が聞き取りやすくなった。ただし、随所分からない英単語が出てきた場合は、会話の文脈から内容を察していたが、未だ知らないことが多く、勉強不足を痛感したため、今後TOEICなどの試験を受験して英語の能力を向上させたい。Field Tripでは、目で見て、耳で聞き、実際に触れてみるといったような五感を用いて全力でタイの文化や生活様式、海外企業事情を理解するよう心掛けた。例えば、タイのBhumibol国王が手掛けたThe Royal Chitralada Projectsの中核であるチットラダー宮殿内の一角にある国民の健康増進を目的とした食品開発研究所や蠟燭製造工場等の見学ツアーに参加し、ロイヤルプロジェクトのブランド商品の生産について学習した。タイ国民の健康的な食生活を推進する農業支援計画の一端に触れ、バイオ技術の利用がタイ国に大きな影響を与えていることを知った。食品加工技術が人々の暮らしを豊かにしていると実感させられたため、日常的に我々が口にする食品の製造過程について学び、食の安全が技術によって支えられているということを意識したい。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>自身の専攻する分野だけでなく、他の分野の事柄について新聞記事を読むなどといった情報収集を常日頃から行い、幅広い知識を得るようにする。また、タイの学生との関わりで強まった積極的な行動力を、自分の研究に活用できるようにする。例えば、研究データの収集・整理によって得られた考察を確固たるものに近づけるための専門知識を収集するために、過去の論文のデータから根気強く探し出したりすることが挙げられる。高度な専門知識を得ることは、今後の研究の幅を広げることに繋がる。英会話能力については、学生同士の交流の中で、身につけていない英単語の量が多いと思ったため、毎日時間を決めて英単語を覚えるといった活動を取り入れる。</p>	